太棹

第八拾八號

東京　太棹社　發行

六月廿五日より三日間於報知講堂開催

六月十日より四日間聯盟創立記念義太夫大會を於鎭西劇開催

暑中御見舞

名物 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

★★★★ 趣味の名菓 名なし草 ★★★★

花の名にちなめる小形菓子
三十餘種を取あはせたる純
江戸趣味の御菓子
御進物用かん入
風流壺入
はかり賣金八拾錢より

日本橋水天宮前

三原堂本店

電話茅場町二六六六番

關西料理

円六

すつぽん椀なら江戸前蒲燒なら
御宴會は大勉強すべて安値に

九段下俎橋
電話九段四〇〇六番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の彈き手も揃へて皆様をお待ち致して居ります。
——円六獨特のサービス——

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】

太はま屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

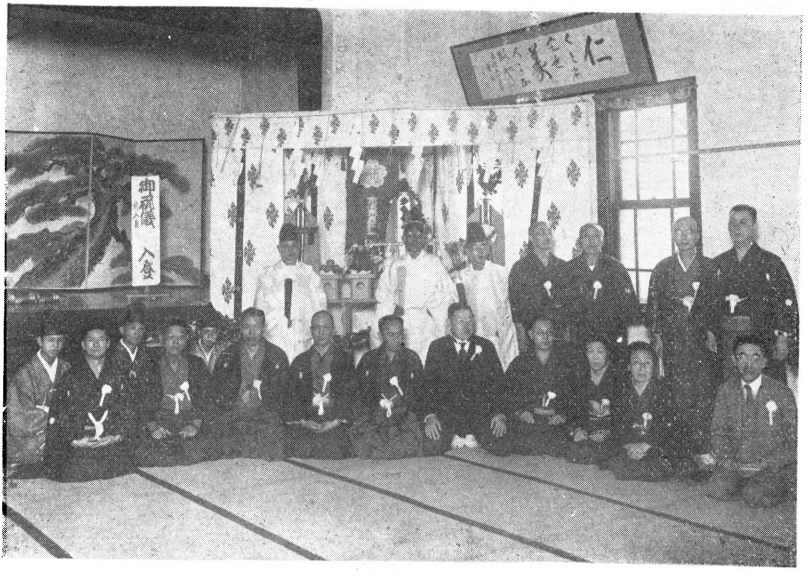
第廿七回東都五十義會

六月廿五日より三日間於報知講堂開催

向て右より安藤都昇・寺岡三幸・河野國聲・的野關路・伊藤松鶴・吉田三芳・細川清・星野桔梗・長谷川文久・高橋可遊・山田壽瓢・がん昇の諸氏。

京濱素義聯盟發會記念

六月十日より四日間聯盟創立記念義太夫大會を於鎭西劇開催



前列向て左より三人目顧問的野關路・會長國友東光・副會長野崎龜鶴・幹事長鈴木其芳の諸氏。

松實さんの或日

庭に打水して——湯上りの清々しさを滿喫する。——溪谷の湧で湯の街の午下り、松實さんは、靜かに物を想ひ、俳聖にも似た面持と氣分とで當て處なしに漫歩するのが迚も好きなのです。今日もこれから、散策に出かけやうとする瞬前の姿です。

暑中御見舞

巴津天會

會長 寶藏寺天昇

顧問 竹本巴津昇

相談役 宮島和紅

常務理事 武藤壽昇

事務長 長谷川勇昇

事務所

杉並區和田本町九五一
竹本巴津昇方
電話中野五七九三番

暑中御見舞

中

澤

巴

暑中御見舞

鈴木松寶

暑中御見舞

近江清華

暑中御見舞

無名會

浄曲

中澤巴
竹内たもつ
鈴木和樂
松田わか葉
河野國聲
桑原美峰

（イロハ順）

暑中御見舞

朝見會

野中一竹
松岡波朝
島倉仙昇
山崎昇朝
島倉松香
白井井孝
平井壽樂

竹本朝見太夫

三福會

高野清遊
浮谷祖樂
佐久間福司
稲葉福代

竹本三福

暑中御見舞

安藤ごくろ

暑中御見舞

豐竹駒登太夫連

（順ハロイ）

一呂力雅高た素源文愛貴龜操美ひ勢

か　　さ久

鶴聲彌章尾し博綠玉松昇鶴　滿司昇

芳聲會

一千里芳壺重

清辰壽芳

豐澤芳太郎

暑中御見舞

細川清

暑中御見舞

義松會

正田大龍　村田玉寶　三口松藤　田中司若　高峰高六　中村小

豐澤松造　豐澤松四郎

綾秀會

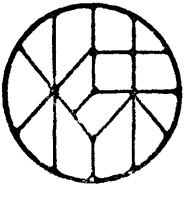
壽會

呂竹龍大歌綾綾治司壽壽壽

壽始司瓢吉路登光光光瓢

竹本綾秀

暑中御見舞



兜

會

事務所

日本橋區兜町一丁目四番地

鈴木甚四郎方

電話茅場町〔二五六五番
二五六六番〕

暑中御見舞

伊藤松鶴
長谷川文久
星野桔梗
吉田三芳
安藤光樂

（イロハ順）

暑中御見舞

武笠宏亮

松岡語松

暑中御見舞

岩木義雀	松本朝章
水戸部壽	小埜長とろ

暑中御見舞

高瀬操	湯原清司
錦錦松	廣瀬いろは

暑中御見舞

白井清華

金田金鳳

暑中御見舞

平田平和	大築葵
吉川浪補	菊池秋月

暑中御見舞

田口司重	平野ろ昇
原田越巴	淺田奇聲

暑中御見舞	
岩田未成	勝川勝川
根本團壽	乃村乃菊

暑中御見舞

宮本武藏

木村さかえ

北村三葵

暑中御見舞

井上巽

小林和舟

暑中御見舞		
柴野筑波	平井榮	小松〇六
歸山歸世花	柳有明	黑川叶

暑中御見舞

沼井盛鶴
沼井盛香

中道素鶴

京濱素義聯盟會長
國友東光

暑中御見舞

鈴木和樂	高橋可遊
巴雪會 阿部一	緒方千晴

暑中御見舞

霜島錦司

西田可松

久保田喜鶴

落合淑人

波多野三樂

寺岡三幸

暑中御見舞

野口みなと	岡田源
塚口清雀	湯淺光玉

暑中御見舞

聲友會

（俳號イロハ順）

竹内とをる
中野吳羽
松岡語松
金田金鳳
鎗田みやこ

竹本津賀太夫

鶴澤司好
鶴澤好造

暑中御見舞

神馬里芳

鶴澤勝助

野澤道之助

鶴澤紘平

吉田登盛

野澤粂造

暑中御見舞

豐澤松太郎

豐澤猿之助

豐澤芳太郎

暑中御見舞	
鶴澤辰六	竹本佳照
竹本素女	竹本駒若

暑中御見舞

日本帝都

義太夫因會

本部　京橋區新富町二丁目一五
電話　京橋〇三一一四番

事務所
男子部　本郷區龍岡町二二
女子部　電話小石川八〇六〇番
芝區西久保巴町四一
電話芝二五七七番

◇ならぬ三味線はおもちやでござる

◇持て生れた名匠氣質

太棹の三絃
其他一般の三絃
は——↓

◇技術と勉强を看板に

◇時節柄破格の大割引　御一報次第參上如何樣の御相談にも應じます

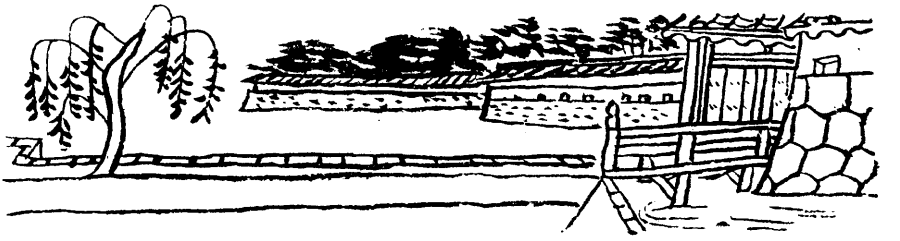
義太夫三絃師

菊屋

十河鑄吉

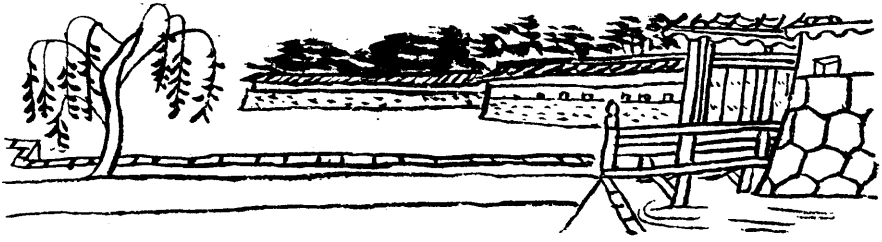
神田區小川町三丁目九番地

電話神田二九七五番（出呼）



太棹　第八拾八號目次

團結の力……近江清華…(二)
鎖夏漫談……鈴木松寶…(二)
忠九を語る太夫が無い……吉田冬葉…(三)
忠九不上演に就て……星野桔梗…(四)
文樂の人々より……(四)
豐澤新左衛門●豐竹呂太夫●豐竹古靱太夫●竹本大隅太夫
文樂樂屋圖譜……宮尾しげを…(六)
義太夫雜誌……齋藤拳三…(八)
盛夏隨想……錦貫六輔…(一〇)
實觀？實感？……北仙…(一〇)
わが隨感錄……近江清華…(一三)
小土佐物語……櫻木俊晃…(一五)



音曲昔噺素養……鐵老…(一八)
鶴澤清六略系譜並に鶴澤德太郎……妙聲庵…(二一)
俳狂……森三好…(二一)

太棹社彙報……(二五)

竹本津賀太夫引退興行●叶會●巴津天會●綾秀會●豊澤芳太郎連の遠征
高瀨操氏大關披露義太夫會●大東京嬉會●野澤道之助連の遠征●細川清氏獨演會●國防献金義太夫會●新義座の渡臺

各席語り物帖より……(二九)
會報……無名會々員一同…(三一)
各地通信……愛好生●鐵老…(三二)
當座帖……(三三)
編輯後記……芳河士…(三三)

表紙●カット……宮尾しげを
口繪　東都五十義會●京濱素義聯盟●鈴木松寶氏

暑中御見舞

『太棹』印刷所

栗原印刷所

牛込區早稲田町五八

電話牛込一四五一番

太棹

第八拾八號

清風高節　（芳河士作品ノ内）

若竹や橋本の遊女ありやなし　蕪村

團結の力

近江清華

去月明治座の文樂座引越興行での忠九不上演問題は、初め、取引所内の愛義家の空氣、並に二三稽古場の不評を耳にして、不取敢樂屋頭取を訪ねて注意を促したのであるが、話はそれからそれへと擴大して反對者が多數に昇り、文樂としては甚だ不利に陷つたが、人形がなければ取り寄せる時日も充分あり、時間もやり繰ればやり繰れるにも拘らず、此の多數の素義有志の反對を一蹴して遂に不上演となつたのは誠に遺憾に堪えない。

一般の觀客には、あんな長たらしいものは向かないとか、澤山の組見を有つてゐるから、八段目の紋十郎は拔けないとかと、種々の營業政策に依る興行とは言ひ乍ら、一方文樂東上の都度多大の犧牲を拂て後援をし、或は研究家に對しても當事者は此の當然容受すべき意見を容受してこそ、文樂向上の一途であり又禮儀言ひ度い事、書き度い事は、澤山ありますが、到底此處では、制限ある紙數では言ひ切れませんし、又書き盡されませんので、それは他日改めて書かせて頂く事にしませう。

此處では、前月に書くお約束をした原稿が間に合はなかつたお詫びを意味した寸言に止めませう。

文樂の事に就て、何か一言述べよといふのが、太棹社の御註文なのですが、これを言ひ出すと迚も長くなりますので、他日に讓り、東京の玄人連が、何故もつと積極的に大衆に向つて運動を起さないかといふ事に就て少々許り申し上げ度いと思ひます。

淨瑠璃を樂しむ人、淨瑠璃道に籍を置く人々は、皆が皆一樣に開口一番『淨瑠璃は結構』だと言ひ、こんな結構なものを、何故大衆が演らないのかと言ひますが、何處がどう結構なのか、淨瑠璃の良さは何處にあるかといふ事を、まづ以て大衆に知らせる一手を忘り乍ら、愚痴たら〳〵並べるのです。

結構の良さを知らせずに、ぼやくのは實際どうかと思ひます。

淨瑠璃を以て、今日を過して居る玄人連は、何よりも先づ第一にこの運動をなすべきでせう。

通ぜざる獨白——では、どんな名言も三文の價値も有りません。

淨瑠璃が、古いなどと考へるのは、よく物を考へない人の言ふ事で、百年も前に出來た西洋音樂の曲を新しいと謂つて明治になつてから出來た淨瑠璃を、古いと謂ふやうにしたのは、一体、誰の罪でせう。

鎖夏漫談

鈴木松寶

でもあるまいか。

文樂座の東上が毎回滿員を以て好成績を收むるのも、決して宣傳の爲ばかりではなからうと思ふ。一般の觀客は當てにならないもので、眞の愛義家こそ不動の後援者ではなからうか。

機關誌『太棹』が、ほんの一部の愛義家と研究家に此の不上演問題の是非を質したに對し、殆ど全部反對の意見を述べてゐるを見ても、今回の忠九不上演は明かに失敗であつた。

文樂座々員は、いろ〳〵の意味に於て此際大に反省すべき機運が到來してゐるのではなからうか。

兎に角後援者として大きな力を持つ東都素義諸家の希望も一蹴されるに於ては東都の愛義家はもつと〳〵大きな團結力が必要で、東都全素義を擧げて一大協會を樹立して事に當り、併して文樂の擁護に努力すべきことを切に感じる。文樂の擁護はとりもなをさず我が淨瑠璃の擁護である。

私は拙文『わが隨感錄』中に群集の力といふ事を說いてゐるが、こゝには團結の力を高唱する。

玄人の宣傳方法が、其の宜しきを得なかつた結果に外なりません。古きをしりぞけ、新しきを喜ぶのが今の時勢です。

誰にも喜ばれ、簡單に判る方法を考へるのが、一番早い方法です。現今より低級であつた昔の庶民階級を對照として、創められた淨瑠璃が、今の頭の進んだ人達に判らない筈はないのです。それは方法が惡いのです。

ですから、大衆の喜ぶやうな古い淨瑠璃を考へたら良いのでせう。兎に角玄人は、餘りにも考へなさ過ぎるようです。

切に奮起を願ひます。

淨瑠璃道のために——

忠九を語る太夫がない

吉田冬葉

忠臣藏の通しで九段目を拔いたのは、一座中に九段目を語る太夫が無いからであります。——とかういつたらば、『馬鹿ナ』と立腹されるでせうが、いやしくも文樂人形淨瑠璃一座として九段目を拔いたとあれば、表面からはさう考へられてもいたし方がないと思ふのであります

しかし、裏面にさうしなければならぬ理由があるとすれば、當今の興行法なるものゝ下に敢へてせねばならぬ一座の太夫さんや三味線さんや人形師のお方に、實にお氣の毒といふより外ありません。

忠臣藏としては四段目、六段目、九段目の三段が作者の最も力を注いだものであることは今更呶々する必要もないことですが、その中でも九段目は、この一段によつて解決をつける最も重要性をおびたもので、その九段目を拔いて公開するといふことは公開される方にも、それだけの何かゞあるのではないかとさへ考へるところであります。

九段目不上演に就て

星野桔梗

去月文樂座東上興行之際、九段目不上演が、文樂座興行毎に大なる犠牲を拂ひ、熱誠なる素義界の多數に頗る不評なる事を、素義界一人であり、文樂後援に何時も少なからぬ犠牲者たる近江清華氏が此事を耳にし、事前に於て、素義の代表として、文樂座の頭取に深甚の厚意を以て注意したるに對し、禮を失したる爲め素義を無視したる事となり、面白からざる結果を來したる事は、斯道の爲め松竹の爲に遺憾千萬の事である。殊に自分は素義の一人である、近江氏とも親交厚く、一方松竹社長とは、父母以來、因緣淺からざる間柄である丈け、一層その惑を深くする者である。然し此れには必ず原因があると思ふ。要するに、近江氏の厚意が松竹社長に徹底しなかつた事と推斷する、つまり傳令が誤つて居た事と思ふ。徹底して居るのに、夫れと聞流してしまふ樣な事は無い、首肯出來る挨拶があれば、近江氏も素義界の人々も、決して分らぬ事を言ふ筈がない、要するに傳令使が不行届に基因する、斯る例は世間に幾多の類例がある、傳令使たる者の反省を促すと共に、事の圓滿ならん事を希望して止まない次第である。

所で九段目不上演と言ふ事は、斯道の上からも、又藝術と言ふ事からも、松竹營業政策から言つても、自分は不賛成である。芝居と人形淨瑠璃とは、非常に相

文樂の人々より

——受信順——

『忠九不上演問題』に就て、文樂座太夫三味線の主なる人々に意見を問合せました處、左記諸氏の回答を得ましたから玆に掲載致します。他は何んの返事もありません。　—記者—

★ 豊澤新左衛門

—(前略)—御尤もなる記事、何分出し物は會社の指圖通りで、部屋の申す事は取上げくれず、時には困る事があります。御察し被下度當方に惡しき事あらばドン〳〵御記載被下度候

★ 豊竹呂太夫

御地素義御連中樣と松竹當事者との間に、如何なる話の行き違ひが御座いましたかは存じませんが、文樂座から發表されました狂言役割に付き、斯樣な問題の起りましたことは

違する所がある。芝居では大抵九段目を出さない。大衆は年に一二度上京する人形淨瑠璃より、芝居を見ると言ふ事は、人員の上でも、又度數も問題にならぬ差がある。芝居の方は見飽きる程見てる。自然鑑識眼が高くなつて居る。爲に九段目の如き、長い丁場の物は、餘程良く演つてもさのみ喜ばない。要するに損な出し物である爲、興行と言ふ立場から、出さないと言ふ事は尤の事と思ふ。人形の方は見るチャンスが少い爲鑑識の程度が低い。寧ろ好奇心が手傳ふ、丸で人間の樣だと言ふ事を鑑賞する。大衆の眼が芝居と人形を見る時の心理が違ふのは此の點にある。例へば阿古屋の三曲で琴の時にチリ、、、、と阿古屋が手を動かすつまらない處をきつと喜ぶ。九段目で力彌が竹を切つて雪が落ちて戸がパラ〳〵とはづれると大に喝采し、小浪を乘せて來る駕の者の一人遣ひの人形がヒョコ〳〵と引込むと非常に喜ぶ。素淨瑠璃と違つて、太夫も三味線も忘れて、人形を見る芝居で飽きる物も飽きない例がいくらもある。又芝居で見られぬ處を見せる事も大衆の爲に良い。又珍らしく思ふ。芝居の十種香の勝賴が箕作と言つて居る事や濡衣の事もよく分らずに見て居る。人形を見ると分る。今度十種香を見る時に面白くなつてくる。芝居の爲にもよい事になり人形の方も好奇心の内に、芝居で見られぬ處をドシ々々見せる、その内に大衆は人形淨瑠璃に對する鑑識眼が高くなつて、阿古屋のチリチリや九段目の障子のはづれたのなぞは感心しなくなつて、人形と言ふ物を見直して來る。そこで人形遣もウカ〳〵出來なくなつて一生懸命勉强する。自然名人も澤山出來る、太夫も三味線も同樣である、それで人形淨瑠璃が發展する。

前に言つた芝居にも及ぼして來る故に古典藝術と言ふ點からも大衆を目標とする興行の上からも、九段目の如きは上演する事が絶對の事であると俱に、芝居と人形淨瑠璃と相違ある點に於て、聊か愚見を述べて世の識者の批判を乞ふ者である。

思ふに未だ前例のないことで御座います。

今後は識らず、私の存じております範圍では、紋下が目を通した狂言、立て方、役割は絶對的のものと考へております。今後此の種の問題がおこる樣では私どもも考へねばなりません。

今まで度々三段目殿中より山科までの立て方が御座いました。この度の大序より八ツ目迄通して一場も拔かずにやつたことも看方によつては面白いではありませんか。

★ 豐竹古靭太夫

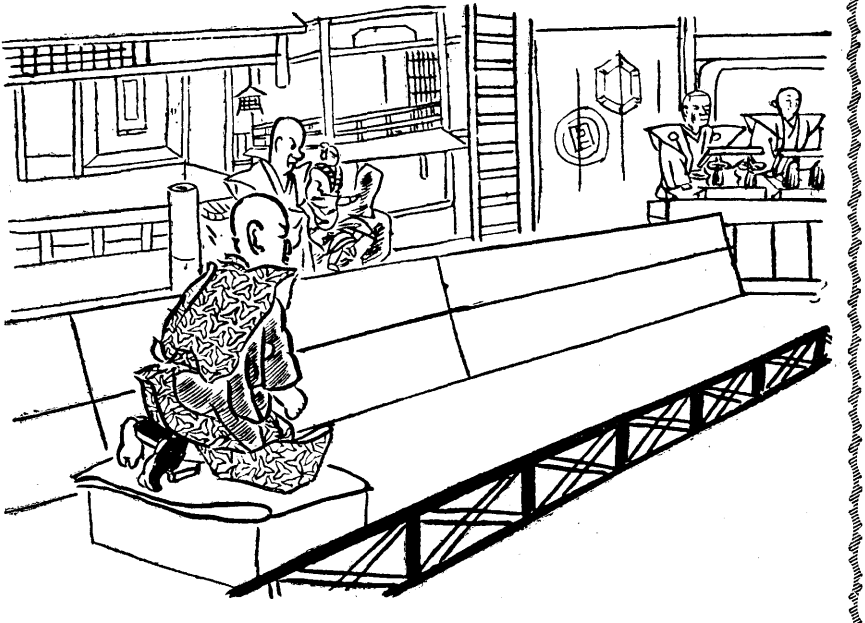
―前略―忠臣藏に九段目のないのは面目ない事ですが、阪地でも此頃はやらないので、何共申上げやうがありません。

★ 竹本大隅太夫

忠九の件御尤の仰せ、文樂關係者の無腦を遺憾に思ひます。吾々はいつも太鼓の替りで申述べる程の價値もありませんが、彼の樣な事はやかましく仰せ下さる事は、斯道の爲め感謝して居ります。

文樂

宮尾

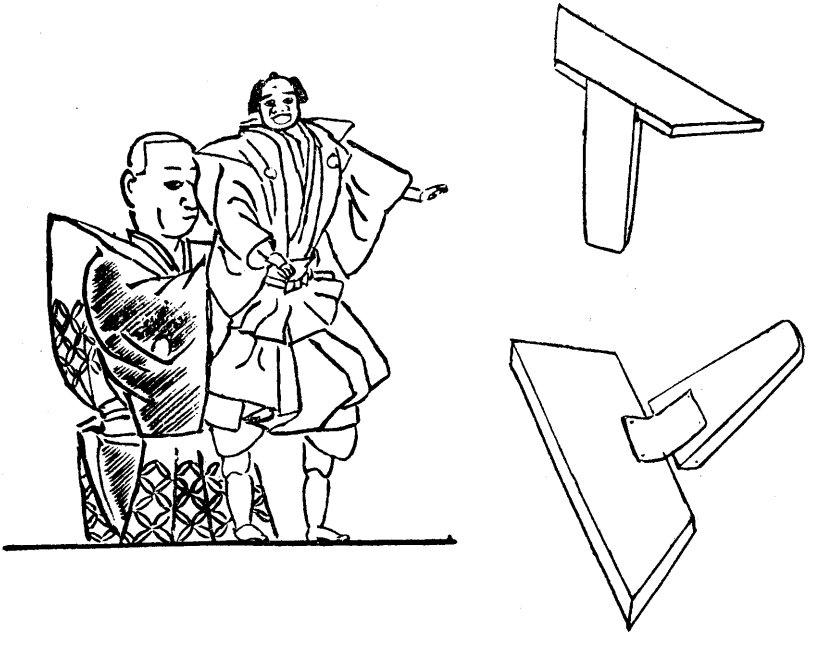


出床

忠臣藏の一力の場で、平右工門が出てくる時、舞臺の右手にある床の上でなく、左手の方、手すりの後ろに小さな赤毛氈を敷いた臺が有つて、そこへ平右工門を語る太夫が出ます。これは文樂人形の淨瑠璃の中で唯一の變つたもので、この場面にしか見られないものです。本床には由良之助とお輕を語る太夫さんが出てゐます。この間の一力の場では古靱太夫がこの出床で語りました、圖は舞臺の横から見たものです。中間平右工門と云ふところで、黒足袋を穿いてゐる所が細かいです。

屋　圖　譜（廿二）

し　げ　を



人形遣の腰板

人形遣ひが出遣ひの時、上下をつけて舞臺へ出て人形を遣ふのに、普通の樣に袴を穿いては形が惡いので腰に圖の樣な板を帶の後にはさみます。これは淨瑠璃の太夫さんの方でも使ひますものです。これを入れますと腰の形が少し出張りますが見た目が美しいです。「形に出來てるのと角ばらない樣に角へ革を張つて折れる樣に成つてゐるのと兩用あります。折れるのは多く旅興行用に使つてゐます。大きさは自由でありますが、大概厚さ四分位四寸五分位の長さで深さは一寸五分位、挿し込む方は三寸位の長さになつてゐます。

義太夫雜話

（土佐太夫引退興行から）

齋藤拳三

帶屋

『晩年程よかつた』此の一言が土佐太夫に送る一番良い餞辭の言葉であらう。

其の最後の『帶屋』は全く良かつた。當人が都新聞に載せた藝談の通り、儀兵衛の作り笑ひと云ふ意企もよく通つた。一體此の人の演出上の野望は仲々遠大難澁なもので、聽手には通らない事が可成多かつた。此の度のお半等はあどけない暖簾口の言葉と、長右衛門と差し向いになつてからの異性を知つた情合の言葉もたしかに受取れた。話に聽く故攝津の八重垣姫は色氣があつたが、中將姫は全く色氣を聽かせなかつたのと同系の手法であらう。

この『帶屋』は故人で町太夫がよかつた層だ。別に大した大太夫でも無かつたらしいが、不思議にこの帶屋が口に合つて〻、少しも院本以外の事を云はないで十分聽手を湛能させたらしい。もつとも法善寺の津太夫がやはりそれだつたらしいが。

人形も面白かつた、小兵吉のお絹が針仕事をする型も、文五郎系のキセルを使ふ演り方と變つて〻面白い。榮三の儀兵衛と玉次郎の長吉との組み合せもよかつた、紋十郎のお半が書置を下駄の上に置いて行く型も、始めて見たが仲々面白い玉幸の長右衛門が此の下駄と書置きを持つて入るのも新案で興があつた。人形芝居は決して歌舞伎の模寫に演らずにかく獨創的でありたい。

唯土佐太夫は毎年上京する度に殆んど數種のプロダクションが繰返された、私の樣な土佐ファンに取つては、相當聽きたいものを聽かせずに引退してしまつた。十年程前の歌舞伎座での太十の如きは、其の出來榮へは別として懷しい、貴いものだつた。松竹當事者は自分で義太夫を語る人——と云つた小範圍を目標に仕過たのでは無からうか。

古靱の妙味

不動の津、流動の古靱、土佐

津太夫は十年一日の如く、其の語り方は一定不變である。これは役者で故中車落語で今の文藥がそれである。然し古靱太夫と土佐太夫は六代目菊五郎とか、今の四代目小さんの如く常に少しづつの變化がある。特に古靱太夫は性理的に聲を痛める人で、其の工夫した語り方は複雜無數であると同時に、觀賞する方からい

つても一番年期がかゝる、其のくせ解れば解る程、かみしめればかみしめる程妙味のある藝風である。

此度の演出に例を取ると『寺子屋』では「キツト見るより」が昔よりも甘い、又呼出しの「チョマよ」が前とは變つた意氣で甘い、『尼ケ崎』の日は非常に亦聲を痛めて居た、で「爽なりし其骨柄」などは前程突つ張りがきかなかつたが「婆樣に泣顏見せ」などは奥に氣をかねる十次郎の氣持ちを實によく出してるのは今度が最上である。『太十』前半の難所の一つ「取付く島もなかりけり」は古靱が誰よりも群を抜いて面白い「し――ま」のシとマの間に一寸泣くのが非常に面白い、これはずつと以前は演らなかつた事である。かう云つた「聽く度に」と云つた妙は土佐太夫にもある『酒屋』を例に取ると、第一今度は一世一代の爲かふるへ聲が無い「これおやじどん」の婆の意氣が前とは變つて實にいゝ。安藤君が前號で書いてゐた、婆の「そうぢやないか」の「か」を殆んど呑んでしまつて「そうぢやあない」など全く今度は變つてゐて輕く云ふ「宗岸のしそこない」も駒太夫などが突込んで云ふのを今度は馬鹿に輕く云ふ。

「問へどもさらに返當は」も少しも突込まない、特に今度は書置になつて「破れるがな」の所を非常に叮寧にやつて宗岸の讀む件を涙聲でサラリと演る。

以上は今度の演出の一例だが、太夫は日によつて聲の出る日と出ない日がある自分の性理的な良否を考察して工夫をこらす事は實に大切であると思ふ。

故越路（貴田）が聲の出ない日程かへつて聽いてて面白かつたのも越路の偉い點である。

義太夫ファンは亦あの語り物かなどと云はずに、どうか叮寧に前年のと批格研究して、太夫の苦心を認めてやつて望しいと思ふ。

私の友人にMと云ふ素義の通人がある此の人は古靱を技巧家だと云ふ、一寸聽くともつともらしいが、彼は技巧を知らない某太夫を作意の跡の無い名人と買かぶつて居る。

私に云はせれば、それは彼自身の藝が全くそれなのである。

人形使ひの義太夫論

菊五郎、吉右衛門とか、若手で我當とか二三人の例外はあるが、大體役者は義太夫が解つてゐない。

自分で下手な義太夫は語るがそれが少しも舞臺の役に立たない。

それと同樣人形使ひも榮三とか故文三とか數人の例外はあらうが、大體其の義太夫論は、常に名人の義太夫を聽きあきてる爲か見當違いが多い。

私は其の實例の多くを知つて居るが、それを一つ〳〵上げた所で、決して斯道を益する譯でもなし、亦決して樂しい事でもないから省略する。

唯人形使ひから聞いた義太夫論を過大に信じてる人のあるのは殘念である。

今度の如く埋れてゐた『扇や』が復活されたとしても、古靱はあの研究家の事だからハラ〳〵屋の呂太夫や時太夫のを知つてるだらうと思ふ、が人形使ひは其の當時の演出を知つてる人が居るだらうかしら。私は若い歌舞伎役者に「義太夫を聽け」とは平氣で云へる、然し「人形を見よ」とは一寸、言ひ切る自信がない

人形使ひは、自分が人形が使ひよくさへあればそれが義太夫の上手、いゝ太夫と思つてるのではないだらうか。

盛夏隨想

綿貫六輔

大阪から、豊竹古靱太夫が、毎月（初春、如月、彌生、等等）送つて下すつた、文樂座人形淨瑠璃の、ビラといへばチンドンヤの安つぽい廣告になりさうだし、番附と申せば藝味稀薄なお相撲にまちがへられるかもしれないが、どう致して、書齋の机のわきに貼つて眺めてゐると胸もすくし、文筆の仕事にある芳香と階調とをそへてくれるし、右上には薄紫の熨斗が押され、下には、古靱太夫のやうに、まんまるな、やはり薄紫色の御判が、えもいはれぬ風韻をはなつてゐるので、これらを見てゐただけで幾十年の天狗が更に數段昇進したやうな氣分である。

まこと、ペンをそのまゝ、一息入れつゝ、これらを見入ると、今迄にみきゝしてきた、無數の文樂の場面が眼前に繰り展げられて、陶醉の佳境に導かれてゆく。

いつであつたか、正宗白鳥氏が、人形淨瑠璃こそ藝術の最高なるもの――といつた意味の事をいつておられたが、誠にさうで、動物のみの人間がやる歌舞伎ほど古典味が崩れ去らぬのも奥床しいところがある。

このにぎやかに、いんさつされたものゝなかに、文樂全體の崇高な藝味が盛りあげられてゐるし、また、文樂の舞臺のさま〳〵な空氣を放して、そのにぎわひを幻想の上にみせてくれる。

かくみとれてゐるうちに、はやくも盛夏になつてきた。

古靱太夫に會つた感懷

具定、圓滿の感じである――でつぷりと太つた身に單衣、その上に薄茶かなんかのさゝやかな袖無羽織（これも名稱を知らず）で、莞爾として出迎へ、こつちのいはうとおもつてゐた事を、さきで皆ないつてしまつて、び

實觀？實感？

北仙

去日或る新聞に、相當の劇評家が、島田正吾の坂崎出羽守の演出が、六代目以上の熱もあり、實觀があると歌舞伎の滅亡を諷された私しは、本誌に劇評を試むる存意は無いが、參考として淺草物を少々書かせて頂いてから本論に入らうと思ひます。

淺草で人氣が續いたら、日本中大手振だと何故ならば、安くて、上手で無ければ人氣が無いからと聞かされては、御最も、其の通りと頷かざるを得ないではありませぬか。馬鹿にしてはいけません。

梅澤昇の石松後編と、長岡城を觀ましたが石松は、梅澤の家の物の價値ある樣に認められました。官軍松川の熱演にも感じました。實際熱がありました。

然し熱と申せば、昔し淺草六區では、度々喧嘩を實觀させられましたが、之れなら眞觀ですから之れ程熱のある觀物は無いでせう、現代劇は寫實と云ふから、實際寄以上の物が

たりと禮をする――その時、私は、大盤石の上に載せられた栗のイガの如き自分を見出した。その栗の毬から頻りと汗が滾れ落ちる。

毎月のその番附のお禮さへ申上ずにしまつた。

「近頃、骨が解り出した、骨の方がいゝやうにおもふ」それに應へて、

「この世界でも、やはり、骨も肉も皮も艷もみな有意義なもので、白（言葉）は殊に大切だ」との大がゝりなお話があつた。

そこへ、津賀太夫、巖太夫の入來で、私は失禮させて頂いた。

古靱太夫も、私を栗の毬の如く不安定で痛々しく感じなされたことであらう。

東都六月興行

六月初日から二十日間、大入である。

土佐太夫の引退披露――裃をめした全員が幾列にか舞臺一ぱいに整然と平れ伏し――莊嚴を極めた。

津太夫の口上は、偉大きかつた。

平伏した土佐太夫の前に、感涙數滴が零れ落ち、土佐太夫それを子供のやうに、掌でふきかくした。

――五十年の聖なる業蹟――大和魂の椽の下の保存者――大日本のあらゆる雄躍はこの精神から――そこで、政府は、ナニをもつてこの至業至要な功勞者に報酬せんとするのであるか？

――終をもつて、其勞をあはれむなし――

山陽が大楠公を論じた公憤である。こゝにもそれがあるが、椽下の力持――に滿足してゐる、否、テンデそんな事は想ひもせぬ、鈴虫が唄つて秋風に沒し去る如く、藝そのものが生命なのであらう。文藝院などとは異つて、何ぞ卑俗の功をおもはん――であらう。

日延興行の假名手本忠臣藏――兜改より戀歌――桃井邸――大下馬先――殿中刄傷――裏門――扇ヶ谷――霞ヶ關――山崎街道――二ツ玉――身賣――勘平切腹――祇園一力――道行旅路の嫁入――の盛りたつぷり、筋の取りかた大きく、よくわかり、そして大熱演はいふ迄もなく、私の眼鏡は涙の鹽で白く曇り手拭はびしよ〳〵になつた。

興行中、河出書房のスフインクス叢書に追ひたてられて二晩ほかいけなかつたのは、殘念であつたし、土佐太夫、古靱太夫のひどろの親切に對して欠禮したのも殘りおほかつた。

無事歸阪の御禮狀に對しても面目なく、そして、安心し、神佛の加護を感謝した。（完）

無い譯であります。

其處へ行くと歌舞伎は、床もあり、三味線もあり、之等「歌」を取り入れたる藝術には不作法の實觀其の儘にせよとは無理では無いでせうか。

之れから義太夫の本論に結び附けますと、歌とは違います。音曲と云ふ方がよろしいですが、ヤハリ實感を與へる巧妙さ、即ち夫れが義太夫の藝術で、露骨なるレビューの賞觀さるゝ御時世では、段々歌舞伎では滿足出來ぬと云ふ御連中には義太夫も、同じ軌道に於て亡び行く譯ですが、實に情無き浮世じやと謂い度くなります。

（七、七稿）

暑中御見舞

兜會幹事長

本多可笑

相場道三十年　わが隨感錄（五）

近江清華

太陽の黑點で、經濟界の變化を豫想し得る學者の學說といふものが、いつも適應正確なら、學者は決して貧乏もしないであらうし、いくら學者であつたとて、貧乏を好んでゐる人もないでありませうから、學者は富豪にならなければならぬ理窟であります。

ところがさういふ「理論」といふものも、永年の「統計」や、諸種の「研究」の成果ではありますが、人の生死――のやうに、一寸した、その癖、實に複雜なる「理外の理」といふものに左右され、支配されることがあるのであります。

又、百戰練磨の士が、正當な經濟界の運行を無視して、いつも勝利を博してゐるとも云へない。

面白いものであります。

田原坂の戰役の時、西鄕隆盛の舍弟、小兵衞が策戰をたてていふに、

「軍を三道に分つて、一は熊本を圍み、一は豊前、豊後に出でて、沿海を制し、一は軍鑑に乘じて、長崎を襲ふ」といふ。

兵法の正しい勝利を見極めた案（つまり正しい理論といふのでありませう）をたてた。すると猛將の桐野利秋がいふに、

『堂々たる行軍をなすべき時に――何ぞ百性兵共（その頃官軍は、士族兵でなく一般募集でありまして、西鄕軍の將士はこれを輕蔑して居つたのであります）を相手に戰法の要あらん』と一笑した。

つまり實戰家であつた（維新前後に中村半次郎を以つて知られてゐた桐野利秋は實際家としての自分の力量を過大に信じすぎたといふのでありませう）利秋は小兵衞の言を容れなかつたのであります。

果せる哉、小兵衞が、

『薩摩隼をして快よく、一死を遂げしめるものは利秋である。また薩摩隼人をして一世を誤らしむるものも利秋である』と嘆じた。その評語の如く、適中し、一敗したのであり

ました。

理論と實際が相一致しなければなかなか最後の勝利を得ることは至難の業であります。

どうも戰爭の例が多いやうでありますが、相場道といふものは、これ皆實戰であつて、大いに兵家の說が適應し得るので。

川中島の合戰では、上杉、武田、兩將共に、この「理論」を超越した、兵家の奇襲妙計を以て對戰しております。

輝虎が、信玄の意表に出で、又、信玄が兵法を外した兵法を以て、相まみえた兩雄の虛々實々の兵戰などは誠に「相場道」に於いて學んで大いに益になる戰術であつたやうに思はれるのであります。

日露戰爭の海戰に、あの有名な、例の「取舵一ぱい」の丁字型の戰術など、實際が理論を打破し、いや、眞實は理論と實際が紙一重の危機を以て相一致して勝利を占めたよい例であるといふべきなのでありませう。

このやうに、相場にも矢張り、理論では上らなければならぬのに下る場合があり、理論からは、下らなければならぬ日に、上る場合があるのであります。

好材料であれば、高くなる。高くなると豫見したら買へばよい。

誠に易々とした一途にすぎない。

ところが、近世經濟界の複雜さは然う簡單な理論通りには事を運んではくれない。

確かに上るべき好材料で下る場合が多々ある——と誠に變なものであります。

好材料の一例として、

日本銀行、一般市中銀行の金利引下げ。

貿易の大出超。

何人が論じても誤りなく理論上の好材料であつて買はなければならぬところでありませう。

ところが實際はその反對にこの好材料が反對に影響してしまふときがあるのです。

それは假りに日銀或は市中一般銀行の利下げ初期である時は、好材料は好材料としてうけいれるのでありますが。

末期に於ては、好材料によつていい材料の終りなので、好材料を利用して進退駈引をするので、惡材料化するといふのであります。

これと反對に惡材料の場合も、市中金利引上げ、日銀利引上、貿易入超——等の惡材料は、

初期——材料通りであるけれども、末期に於ては、前述の如く、好材料に轉化するのであります。かういふ風に複雜であります故なか〳〵一樣にはゆかないのであります。

群集の力

衆愚——

といふ言葉のある通り、蝟集した人間の群といふものは誠に變哲なもので意志を持たぬ一個の愚劣な集團である。

彼等には姿といふものがない。

實體を摑へることの出來ぬ、幽鬼のやうな、無形の妖怪であります。

幽靈を見たり枯尾花といふのがある——しかし人はこの幽靈にのみかかわつて、現實にある枯尾花の姿をみない。見やうともしない、しかも、この衆愚の見ないものへの姿——見ない現實をこしらへて、口から口へ傳へる無形の「有」これが實におそろしい强力な力を持つてゐるものであります。

一個の石を投ずるとその波紋が大きな圓を描いて擴がつてゆくやうに、この無形の群衆は實におそろしい宣傳力を有してゐるものであります。

明治三十七八年に青年期を送つた私たちは實に彼等の姿や力の素晴しさを知つてゐる。

世に——「英雄」といふ「現實の人間」があるよりも「英雄」といふ觀念をこしらへた群衆の無形の力がおそろしい力を發する。

が、一度、この群衆が自分を知り、相手を見ると、今度は恰るで反對の强力な力を以つて、壓しかかつて來るのであります。

一個の群衆の力は、群衆として持つ莫迦々々しい力といふもので、英雄であらうが、一國家であらうがぐんぐん自分の思ふ方向にひきづつていつてしまふものであります。

これは見方によつては、大勢ともいふことが出來ませう。

群衆のもつ意志は一定の方向や、指導力がなくて右往左往し摑みどころがありません。

この摑みどころのない無形の妖怪のやうな群衆の力に、我々の世界があちらへ持つてゆかれ、こちらへ持つてゆかれする時があるものであります。

莫迦々々しいやうに思へますが致し方がないのであります。

彼等には姿がない。

決定する理論もなく、探ぐる中心がない。

そこに群衆の力の怖ろしさがある。

はかることが出來ぬから怖ろしい。

意志のない個人が相集つて、群衆としての、歪んだ意志をもつ怖ろしさと、恐怖があるといふのでありませう。

この怖ろしい群衆の力といふものが、絶えず、或る時は、それが大きく、又、或る時は小さく、經濟界に於いて不思議な業をなしてゐるものであります。

「業」——私は今「わざ」とついいひましたがいい言葉だと思ひます——「へん」な「わざ」を常に作り出してゐるものであります。

學究の理論が、經濟界を思ふ意志のやうに出來ぬところもこの「わざ」の力があるといふべきでせう。

小土佐物語（三）

櫻木俊晃

ある日鍋屋上野にお淡ひがあつたのですれ、私も丈五郎さんについて會場へ行つたんです、すると『お妻が上つてゐるからやらさう』といふ話になつて『お前やるか』と聞かれて、そこが子供ではあり盲蛇といふやつでせう臆面もなく『やる』と答へたんです。そこでタタキ扇一本で敎へられた自分が大膽不敵にも人々の懸念を退けて三味線を彈いて語つたといふものです。それが大出來だつたといふので歸りにうどんを奢つて貰つて、大きに褒められたのです。その時のうれしさといふものは今でもよう忘れませんよ。

こんな事が動機となつて、いよいよ見込があると思はれたのでせう、三味線の彈ける師匠のところへやらうといふことになつて初めて柳吉についたのです。ところが柳吉の家が家庭的に面白くないことがあつて、照吉のところへ變つたのです、照吉は提灯屋の娘で、こゝの家はとても朗らかな家でお弟子も澤山にあつたのです。さうかうしてゐる中に是等一座の頭になつてゐた金枝が、東京へ行つてゐる京枝に買はれて東京へ行つてしまつたので、頭をとられた手足のやうに一座はみんなどろ〳〵と遊んで暮すといふことになつてしまつたのです。

だが天はよくしたもので、そんな有樣の中京の義太夫界へ這入つて來たのが土佐太夫なんですよ。何でも文樂の仕打か何かに不平があつて飛び出した土佐太夫が名古屋へ來て、芯をとられてばら〳〵になつてゐた一座を集め率ゐることになつたのです。そして近鄕近在を語り歩くことになつたんです。土佐太夫はこの時もう七十七の老人だつたんですが、世話ものが得意で八百屋だとか風呂だとか帶屋、沼津などが十八番で。よい聲で聽衆を唸らせたものです。こんな老人でしたけれど非

暑中御見舞

竹本津太夫

豊竹古靱太夫

豊竹呂太夫

常にまめな人で小屋を掛けると大方一番から樂屋できいてゐたものでした。一寸退屈するやうな時はふらりと出かけて、そこいらを歩いて來て又聽いてゐるといつた人だつたので自然前座の者の語るのも耳に入れた譯なのです。

たまたま私が語つてゐる時に土佐太夫がきつけて『いゝ聲をしてやつてゐるぢやあないか、あれは誰だ？』『オヤ、可愛い娘ぢやないか』で、この時私は土佐太夫に見染められたのですね。それからは土佐太夫には私が可愛くて〳〵たまらなかつたのでせう、大變に可愛がつてくれたのです。これが丁度私の十二歳の時です。

何しても師匠の照吉が、先に言つたやうに人氣がありお弟子が澤山あつたものですから、お弟子が毎晩連れて行つて貰ふわけにはいかないので、一晩おきに連れて行つて貰ふことになつてゐたのですよ。ところが私を連れて行かない時は土佐太夫が物足らなくて、照吉に向つて『可愛いお妻をなぜ連れて來ないのだ、毎晩つれて來ておやりいな』といふ言葉をかけて呉れたので、私だけは毎晩行きなさいといふことになつたんです。ところが十一や十二の娘を夜おそく一人で家へ歸らすわけにもいかないので、毎晩迎へに來てくれるのが兄なんです。毎晩では迎へに出るのも厄介なので師匠の家に泊めて貰つたこともあるんです。

土佐太夫がどんなに私を可愛がつてくれたかといふことで、今でも忘れないで憶えてゐることがあるのですが……。その頃の天保錢一枚といへば子供には大變なお小遣だつたのですが、土佐太夫は、その天保錢を五枚づゝ水引で縛つて、その水引の端をつまんでぶらさげて『これお前にあげやう』といつて度々呉れよつたんですね。師匠の照吉にはいつも『お妻さんは仕合せだ〳〵』と羨まれたものでした。

その中に照吉も柚吉も東京へ買はれてしまふといふことになり、小さい弟子達がワアワアと泣いて別れを惜んだものでした。あとに取殘された私は自然と土佐太夫につくといふ結果になつてしまつたのです。その頃土佐太夫は、弟子の土佐子といふのが宿屋の娘であつた關係から、その宿屋に寢泊りしてゐたのです。家内も無ければ慾もない人で、今から思ふと本當に聖人みたいな人でしたよ。土佐

暑中御見舞

鶴澤道八

豊澤廣助

鶴澤清六

太夫は本當の孫のやうに可愛い私を始終そばに置いておきたかつたのでせう『この宿屋に居りなさい』といはれて、子供のことではあり平氣で、その宿屋に居ることになつたんです。またその宿屋のおつかさんが私を本當の子供のやうに可愛がつてくれるといふ鹽梅でまことに平和な幸福な時代でした。

暫らくたつともう興行ばかりして廻つて歩いて席温まるといふことを知らないやうになりましたが、興行中でも土佐太夫は自分が語るよりも、小さい私に語らせたくて仕方がない。一段語りかけたかと思ふと

『もうこんな年よりになりまして、聲も惡いしお色氣もなし却つてお聞き苦しいことでございませう、あとは可愛い孫に語らせますから一重に御愛顧を……』

といつた丁寧な口上を殘して高座を下りて來て、あとを私に語らせるやうなことがしよつちうでした。するとそれが又人氣に投じてワアツと小屋が沸き返る騷ぎです。私が語つてゐる中何度舞臺へお金を投げられたか知れませんよ。或時など差して縛つたまゝの穴錢が三味線彈きの右手に當つて三味線が彈けなくなつてしまつた事もありましたよ。だけどこんな幸福なことばかりではなかつた。田舍へ行く時など師匠は老人のことで、いつも駕籠に乘つて行つたものですが、私なんかは皆歩いて行つたものです。そんな時土佐太夫は『俺はもう駕籠は廢すよ』といひ出したものです。なぜかときけば私を指ざして『こんな小さな子供を歩かして、俺が駕籠に乘つて歩いては氣の毒でならん、もう俺も歩く』なんて言ひ出して、とう〳〵私も駕籠に乘せて貰ふといふ結果にもなつたんです。土佐太夫は心から私を孫のやうに可愛かつたんでせうね。難儀をした事もありますよ。はつきり何時と記憶もないが大垣からギッチラ〳〵と漕ぐ小舟で眞暗な夜を桑名へ行つた時なんか心細いことだつたんです。

暑中御見舞

三ツ木美登利

暑中御見舞

鶴澤寛治郎

桐竹紋十郎

桐竹門造

音曲昔噺素養（二）

大阪　鐵　老（寄）

今昔耳鳥齋主人の號は浪花音曲研究古考家として其名廣く、舊與銘人の事を辨へ、世上に融通せり。「文政の通人古太瓶藥居」親しく門に入て聞くに「昔噺の滋味理曉を、草紙の端に書きとゞめ、友樂初心者助けにもと」云々とあり、撰擇して敢て一夕の笑樂の具に供し參らせん

長は繼き短は切ると云事

長は繼き短かきは切るといふ事、長きといふは、仮言壹尺の物壹尺一寸より四寸九歩までを長きとす。壹尺より同九歩迄を短きとす長くは繼のフシ「薄雪」にあり、あだおろそかにはそんじませれども、節し長きは繼の節なるべし、短は切レの心は長有り、繼の節にて心得べし。

詞に品ある事

詞にも品あり、相手向かいの詰合と、また他の事語ると詞にちがひ有り、詰合も語りも同じ格にては種別なし、心付べし。愁の内に修羅あり、修羅の内に愁あり、何れも文句に應ぜずしては音曲にあらず。

浄瑠璃は心、三味線人形は手足なり。手足の動は心より發するなれば、三味線も人形も語人の心に應じ、愁はうれひ、修羅と修羅よく〳〵心を付べし。左無くては三味線は糸を能くひくといふなるべし。浄瑠璃をひくとは云がたし。人形も其通り、大塔の宮音頭の段踊りと人の心を浮かす道具なれども、物賣りの内に力若が心の内思ひやられ愁を催するは浄瑠璃の語り樣なり、なす事〳〵、是等の道具にて察すべし。花園が音頭のふくみ愁ひより起る。何れも如斯、隨分〳〵心懸鍛練すべ

暑中御見舞
高級裁縫
秋山洋服店
秋山ゆたか
淀橋區淀橋七二一

暑中御見舞
安藤都昇
竹本都太夫

商右顯す所の區々一概には定めがたく士農工しその別れあり。

四音の事

一、祝言、幽玄、戀慕、哀傷、此四音工夫の第一なり。祝言の時は文句うつりを成程正しく、太からず細そからず早きを本とす。是祝言の地躰なり。たとひ殘りの音を語るとも聲はいつまでも祝言の聲にて心に思ひ入きをかへて語るべし。

一、幽玄は祝言の聲を其儘にて吟をやはらげ、うき〳〵と只琴笛鼓などを聞く花のもとに日をくらし、家路を忘るる心にて語るべし。

一、戀慕は幽玄の上にせつなる心ざしを專らとす。如何にも人のうちもまれなつかしき心を持ち、ふかく思ひ入て語るべし、思ひ内にあれば色外にあらはるる白露も紅葉におけば、紅の玉と云へるが如し。

一、哀傷九事是は前へのよせいを悉く忘れ戀慕を少し殘し、よはくならぬ樣に心を持ち心底に無常を專一とするなり。

音曲身構への事

惣じて音曲は身がまへ第一なり。先づわり膝にして腰をすへ頭をろくに持ち、心は其儘心をちりげに置く、身がまへあしければ、聲の出所あしく諸藝ともに右に心得なきは、たしなみ薄き故なり。

節の四氣の事

一、節の四氣といふ事。(一)には調子。(二)には拍子。(三)に節。(四)には時の氣。四音の位を考へ語るを以て四氣と云ふ。また節が躰をもつ躰が節をもつていふ事あり。又拍子が程をもつて程が拍子をもつて云ふもあり、よく〳〵心得あるべし。

一、口舌心の音曲といふ事口舌よくかなひ、心のききたるを言ふなり。此三ツ一ツも欠けては有べからず。假言口舌よく叶ふとも或は座敷の禁句又俄得調子を忘れなどせば其興あるべからず。能々心得べし。口と云は文字扱ひ、鮮明にすら〳〵と自由にいひわけ開合假名づかひを極め文字に實を入れて、しかも節しきれもなく、かる〳〵と語る所は舌なり。心に萬法こもるなれば、四音曲は聲に力を忘れ心に力をもつべしとあり、よく〳〵工夫あるべし。

暑見

浅草 音女會（イロハ順）

米惠比壽家 富千代
浪花家 かきつ
竹新春本 竹
福叶家 小町松
富士吉川 小つな
菊新春本 幸三
新春菊の家 綾春
高本 喜代
竹本 志磨葉
竹豊の家 昇吉之助

（事幹）
惠比壽家 富之助
日の家 八重吉

（役談相）
福助 長谷川文久
吉本 平井榮

中舞

一、淨瑠璃の中へ外の音曲入るとても、夫へうつる所又それより淨瑠璃へ移る音に木に竹をつきたる樣にてはせんなし、兎角うつりよく〳〵工夫稽古あるべし。さすれば後には自然と名人ともなるなり。

修羅の事

修羅は心を鎭め間拍子油斷なく口はやく語るべし、心急げは間拍子崩れ文句も分らず惡し、たゞ心靜かに口拍子にて語るべし、間拍子間拍子ひとつになれば是くずるゝなり。文句靜かなる時は心持をはやく語るべし。

景事道行の傳

景事道行などは心勇しく靜に語るがよし、心の句切り第一に心掛べし、心の句切のなき有て文句なまり或は分らず早き拍子事はなほもつてなり。

産字の事

産事と言ふ事あり、先ゆりながしは（産み字）にてゆるべし「産み字」左にあらはす。

いぃ、九、ろを、十、はぁ、十、にぃ、ほを、へ九ゑ、と、を、ちぃ、りぃ、ぬぅ、九、るぅ、をを、わぁ、かぁ、よを、たぁ、れゑ、そを、つぅ、れ、ゑ、なぁ、らぁ、むぅ、うぅ、ゐぃ、のを、おを、くぅ、やぁ、まぁ、けゑ、ふぅ、こを、えゑ、てゑ、あぁ、さぁ、きぃ、ゆぅ、めゑ、みぃ、しぃ、ゑゑ、ひぃ、もぅ、せゑ、すぅ。

右の通り文句の分れは産み字より有なり。或は歌にても淨瑠璃にても又は節事にても皆産字にて引事あり、ゆる事あり。

いぃ、ろを、は、

右ゑひもせすまで如斯し、とくと記すに及ばず、淨瑠璃歌にても心得第一なり。

暑中御見舞

私事、病氣の爲め醫師の勸告に依り義太夫を思ひ切り久しく休演、從て諸賢の芝眉を拜するの機會も遠くなりましたが、酷暑の砌皆樣の御健勝を慶賀仕り併て暑中御見舞申上ます。

京橋區木挽町五丁目一番地

歌舞伎座前

辨松總本店

玉井松樂

電話銀座（自六〇三番 至六〇六番）

鶴澤清六略譜並に鶴澤德太郎

妙聲庵

初代鶴澤清六の塚が向島の長明寺に發見されたといふ事は、寫眞を添えて、前號で紹介致しましたが、この『鶴澤清六系譜』は同時に掲載すべく豐竹古靱太夫師に寄稿を依頼してをきました處、同師は歸阪後病臥の爲め執筆が遲れて本號に掲載する事に致しました。（記者）

鶴澤清六略系譜

初代鶴澤清六は初代鶴澤勝次郎の門人にて、幼名を德太郎と云ふ。

二代鶴澤清六は初代の門人にて、福造より六三郎と成り三代目德太郎を襲ぐ。

三代鶴澤清六は二代目鶴太郎の門人にて、幼名福太郎より三代鶴太郎襲名、後に又三代叶と成る。四代鶴澤清六は現今道八、前名友松時代の門人にて、幼名政二郎後に五代目德太郎を襲名、當代四代目を相續す。

鶴澤德太郎略系譜

初代德太郎初代鶴澤清六となる。

二代德太郎初代清六の門人にて、幼名清三後に二代目名跡相續清六之高弟也。

三代德太郎初代清六の門人、後年二代目清六を相續す。

四代德太郎二代吉左衛門の門人にて吉丸と云ふ、後に三造と改む、後年四代德太郎を襲名なし再改名八代目鶴澤三二となる。

五代德太郎は現今の四代目鶴澤清六となる。

鶴澤清六系譜說明並に鶴澤德太郎

初代清六は初代鶴澤勝治郎（通稱を笹屋と云ふ、後に二世鶴澤清七と成）の門人にて文政十一戊子歲正月二日初日御靈社內芝居義經千本櫻を興行の時鶴澤德太郎と稱し始めて出座、于時十五歲、其後師に從て修行怠りなく追々出世し各芝居へ出座、天保五申午歲正月御靈社內芝居へ出勤し豐竹靱太夫（初代にして泉屋五郎兵衛と云ふ素名を燕子と號し、うつぼ于魚商の主人、賣店並に三勝酒屋を語り活かした名太夫）の合三味線と成、中途德太郎を篤太郎と一時文字を替へる、又元々に復す引續き出座、天保七甲歲八月十六日初日座摩社內芝居にて玉藻前旭袂の時德太郎を初代鶴澤清六と改名す、後彼名高き藍玉組太夫を始め初代大隅太夫又は勢見太夫を彈く、弘化の末より嘉永の始め東京表にて初代豐竹靱太夫を彈き各芝居各席を廻り興行す。嘉永元年同地に於て靱太夫死去後同師門人豆太夫改小靱太夫を彈き暫時勤められしが、故有て歸阪し文久三年三月座摩神社內芝居へ豐竹岡太夫を東京より呼寄せ、久々同太夫を彈阪地に出座

此時繪本太功記尼ヶ崎の段を彈く。其後又々引籠り居られしが明治初年東京より小鞨太夫歸阪稻荷社內文樂軒芝居へ出勤、名の文字を古鞨と改め、後松島へ移轉文樂座となる。是に暫時出座後退座す。是初代也。其後道頓堀の若太夫芝居へ出勤なし久々にて古鞨太夫の合三味線を勤む。夫より角丸堀江市の側大江橋と各人形芝居へ出勤なし、三味線部の大師匠と呼れ至道の大立者なり。明治九子歲十一月大江橋小家にて興行之太功記の時

乍憚口上

秋冷之砌に御座候處先以て市中御且那樣方益々御勇健に被遊御座恐悅至極に奉存候隨て私儀老年に及び藝道も御聞に達し候ても仲々御耳に留り候樣之儀は無之候に付當盆替り狂言を一世一代と仕り候心底にて御名殘り口上も申上候處今度古鞨太夫始め座中弟子とも未だ藝道不行屆の者計り故に今暫くの內後見同樣にて出勤致し呉候樣再三の賴みに付不取敢出勤仕候間不相變是迄の通り御贔屓御取立の程を奉希上候以上

月　日　鶴澤清六

有樣の口上書を番附面に出せしは此初代清六一人に留り、古より斯樣の事なく此口上書の前興行には引退の口上書もなく、只三味線顏附の箱に一世一代鶴澤清六とあり、此時に舞臺にて引退口上を述べられしものと見え、依て次興行に右口上書を載せしものと思はる。引續いて芝居へ出勤せられしが明治十年の始より少し不快にて引籠り居たるに天命限りあり、流石一代の名手も明治十一寅年五月廿三日逝去す。法名釋清嚴、行年六十五、俳號糸鳳、墓地四天王寺北側墓地瑠璃殿東橫南面にあり、家號を萬屋と云へ鶴澤清六を本名とせり。

二代目清六初代の門人にて幼名を福造と云ふ、永らく東京表に滯在中鶴澤六三郎と改む明治三年歲九月歸阪稻荷社內文樂軒芝居へ出勤す。此時木下蔭狹間合戰の時三代目鶴澤德太郎を襲名す、明治十一年五月師匠死去後同十三辰歲三月松島文樂座に於て二代目鶴澤清六師名を相續す。是より先き師の病氣中（德太郎時代明治十年頃）暫時初代豐竹古鞨太夫を彈く、改名後明治十四巳年六月興行迄芝居を勤め、夫より東京へ赴き在住蠣殼町に住居す。人呼で蠣殼町の師匠と云ふ、明治三十四年十二月廿一日逝去、法名深心院圓達日清信士俗名石井平次郎

墓所東京市淺草區淺草橋端日蓮宗長昌寺に有行年不明。

三代目清六二代鶴澤鶴太郎（通稱黑鶴と云ふ）の門人にて明治元年靜岡市の永田家に生れ、幼にして長唄の三絃を習ひ仲々の名手で有つた、中途義太夫の三味を好み是に替る、當時鶴太郎靜岡へ興行に來り福太郎の三味線を聞き感服し早速兩親に懇望。同十七年養子として阪地へ迎へいよ〳〵藝名を鶴澤福太郎と本名其儘に名乘らせ、同十八年正月御靈文樂座興行狹間合戰の通し狂言の時番附に始めて筆上の下より二枚目の所にのる、是より田中姓と成、同年九十十一と三ヶ月東京淺草猿若町に於て文樂座引越し興行に東上出勤。翌十九年正月御靈文樂座へ出勤此時には番附面筆下細字頭より四枚目に昇進し古老の竹本浪太夫の三味を受持ち早一廉である。同年八月師養父鶴太郎死去、于時同師廿九歲仲々の名手でありし。翌二十年正月興行妹背山婦女庭訓の時三代目鶴太郎名跡を相續番附面筆上の細字頭より三枚目に昇進次興行國姓爺合戰の時又々二枚目へ昇る。次興行伊賀越の時本澤四枚目へ昇進翌廿一年九月興行に筆上本澤四枚目に替る、翌廿二年八月曾我御狩の卷の時

筆下三枚目と成、翌廿三年三月六代目豊竹時太夫（通稱かぶら又佛法齋松朝）久々芝居へ出勤、信仰記冷光尼庵室の段を語る、其三味線を受持引續時太夫を彈き廿三歳にて三段目彈きとなり、一の谷陣屋の切を勤む、夫より時太夫と別れ豊竹呂太夫を彈く事に成、四年十月興行に姫小松三の切俊寛島物語の段を呂太夫鶴太郎にて勤め大好評を博す、同廿四年十一月に三味線方之入座の者有て筆上四枚目とかはる、廿五年三月千本櫻の時筆下三枚目と元の所にかはる、同廿六年正月八陣守護城の時三代目鶴澤叶の名跡を襲名す、此時の持役は毒酒の段切竹本津太夫（法善寺）を彈く又々八つ目切本城之段越路太夫の三味を替り役なし二段を勤む、此頃豊竹呂太夫の三味は鶴澤勝鳳が彈く、同年三月菅原傳授の時筆上三枚目に昇進。同廿九年九月出世太平記の時筆下二枚目と成、同卅一年正月信仰記の時鶴澤勇造鶴澤叶二枚差にて中軸に昇進、此時又々豊竹呂太夫を彈て出勤同年三月妹背山婦女庭訓の時中軸に鶴澤才治（後に五世竹澤權右衞門）と成、其風鈴に筆上に勇造筆下に叶となる、同年六月源平布引瀧の時三段目切實盛物語の段を勤めて文樂座を引退し堀江明樂座へ清水町團平師の後を受けて竹本大隅太夫（三代目）を彈いて出勤す。同卅六年五月大隅太夫久々文樂座へ出勤、此時攝津大掾改名披露興行妹背山切に卅三所壺坂寺の段を御目見得狂言同時に叶も久々に座へ出勤なす、番附面は太夫附と成、夫より帶屋の段を次興行に勤め此時三代目鶴澤清六名跡相續なす、引續き吃の又平、布引瀧琵琶、八陣八之切、伊賀越沼津、彦山毛谷村、一の谷三の切、鰻谷合邦下、長局、菅原佐田村、壽しや、狹間合戰竹中砦、三代記八、引窓、躑仇討瀧、鎌腹廿四孝三、新町封印切、伊賀越岡崎、是にて文樂座を退座、卅九年七月上旬なり、同年十月始より北海道を巡業す、一座は竹本大隅太夫鶴澤清六、つばめ太夫（現今古靱）野澤吉松、靜太夫（現今大隅）豊澤團友外門弟一同にて二ヶ月許りを廻り歸阪す。此間何か事故有て大隅太夫と清六は別れ歸阪後一人文樂座へ歸座なす。同四十年三月忠臣藏の時より入座、番附面は廣作玉助と自分中軸の三枚差、此時の役は道行の眞を勤む、其後も掛合又は道行とを毎興行に役附中途に七五三太夫を一二度彈き、又三代目南部太夫の菅原東天紅の段を彈きし事あり、明治四十二年六月興行より當代二代古靱太夫の合三味線と成り、引續文樂出座專ら古靱敎導の任に當る、大正六年正月興行一の谷の時番附面一人中軸となる、同年五月より古靱太夫清六一行にて地方巡業に出て、同年八月上旬一旦歸阪し、古靱太夫は滿鮮旅行に出るに付清六は阪地に止まり文樂座へ出勤、現今駒太夫の廿四孝下駄場を彈く、次興行より六代故彌太夫の三味線を受持つ、一方古靱は當今の野澤吉彌の三味線にて滿鮮各地を廻り歸阪後大正七年春正月興行より又々文樂座へ出勤す。同年九月盆替り興行に元々通り清六古靱太夫の合三味線となり、吉彌は彌太夫を彈く、夫より引續き出勤大正十一年正月少しく風邪の氣味にて床を休みしが、漸次重態に陷り惜俟哉享年五十五歳にて遠逝す。嗚呼十七歳にして文樂へ出座し直に浪太夫の引立に依り各大家の三味線を彈き明治大正の名手なりしが天滿東寺町寶珠院に葬らる。

法名　鶴林院福澤清水居士　俗名田中福太郎

四代目鶴澤清六、現今鶴澤道八の門人にて明治廿三年東京四ッ谷佐藤家に生れ、本名を正哉と云ふ、十三歳の時道八の友松と名乘る時代に東京巡業中入門なし初名を政次郎と稱

す、師に隨い各席並に各地を興行の上阪地に來りて明樂座堀江座にて修行、明治四十二年第五師團へ入營滿期退營後先代津太夫後に七世綱太夫家之跡取りと成、大正元年九月興行に現今之土佐太夫伊達太夫時代に合三味線と成、五代目鶴澤德太郎名跡襲名近松座に出勤此時の持役廿四孝四之切十種香之段親類關係にて東京で死去なせし三代豐澤團平ツレ引をなす、後北海道へ巡業をし歸阪後伊達太夫と別れ大正三年正月に御靈文樂座へ入座、引續同座に於て修行大正六年五月古靱太夫清六各地巡業之時錦太夫を彈き一座に加入、滿鮮旅行之時も同座す、大正七年春歸阪文樂へ又々歸座夫より各太夫を彈いて出勤せしが、大正十一年頃暫時休座後大正十二年十月五日初日假名手本忠臣藏通し興行の時、四世鶴澤清六名跡相續して始めて當代二代目豐竹古靱太夫の合三味線となりて現今に至る。

前名鶴澤德太郎系譜ノ內

初代德太郎は初代清六也、俳號糸鳳と云ふ二代德太郎は初代之高弟にて始め清三と云ふ。後に二代目德太郎を襲名、本名を鈴木五郎兵衛迎仲々の名手、阪地に在住せば二代目清六名跡を繼ぐべきなれ共、早くに北海道へ渡り小樽に居を定めし故弟門人たる三代目德太郎へ讓り、自分は師の俳號を讓り受け糸鳳軒と名乘りて專ら稽古に餘念なかりしが、明治四十年正月十六日小樽に於て逝去す、行年七十六歳。

三代德太郎は二代目清六也。

四代德太郎は二代吉左衞門の門人にて本名佐山種三郎と云ふ。幼年にて藝名を吉丸と名乘り師に隨い芝居へ出勤、師死去後二代勝七之門に入り三造と改名、後明治廿三年九月興行御靈文樂座にて浦島太郎倭物語通しの時四代目鶴澤德太郎名跡襲名、後明治卅三年三月興行新薄雪物語の時再改名八代目鶴澤三二名跡襲名す、大正七年六月廿九日行年五十七歳にて死去す。

法名寂光院淨譽清風居士。

▼▼▼ 狂俳 ▲▲▲

森三好

見返し（盛夏）農家が豊年見込んどる
（探題）植込み以後の天候順調

第二番句（納涼）娘に聽客付ひて來る
（探題）素義の宣傳當込む大入

第三番句（納涼）風呂で一と口語ッとる
（探題）坊ーやも眞似するツン〳〵テン〳〵

第四番句（納涼）何ッ來て見ても會が有る
（探題）遠がは帝都に盛んな太棹

第五番句（執心）朝晩一度は行ッて見る
（探題）習ふ語りに馴れる三味線

第六番句（益々）東都の倶樂部數殖へる
（探題）古典藝術磨く愛義家

第七番句（元氣）風呂で思はず聲高い
（探題）傍りも恥ぢず語る一と節

第八番句（元氣）今日は旦那の機嫌良い
（探題）温習會に當てしお天狗

第九番句（元氣）汗で健康生み出だす
（探題）思はず張り込む太夫出演

第十節（フイヲ、アマコ）太棹は、何ッ來る月も分り良く
（探題）海外迄も知れる良本

大尾（元氣）勇士の應召勇ましい
（探題）胸に勝利を描く決戰

透逸（盛夏）續く天氣に暑が募る
（探題）暑中見舞の芳名掲載

太棹社彙報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

竹本津賀太夫引退興行

襲きに竹本土佐太夫の引退、次いで今秋は東都大日本義太夫因會々長竹本津賀太夫の引退と次々に斯界を寂しうし、各方面から惜まれてゐる同師の引退興行は左記豪華な番組のもとに七月廿七日正午より新橋演舞場に於て華々しく開演する事に決定した。因に同師は慶應元年四月大阪市西區に生れ七歳にして二代目竹本和佐太夫（後の竹本津賀太夫）の門に入り、廿二歳にして師匠津賀太夫の改名に際し後を承けて三代目竹本和佐太夫を襲名、卅四歳の時太夫より三味線に替り五世鶴澤仲助を襲名して下阪文樂座に出勤明治卅五年師匠の死去にあひ、翌年再び上京、卅九年に至り六代目竹本津賀太夫を襲名、約五十六年餘斯道に貢献して今日に至つたものである。

なほ永々經緯を生じて別れてゐた永年の合三味線豊澤猿之助師と此の最後の舞臺に、凡ての私情を捨てゝ握手をすることになつた由、誠に芽出度き限りである。

第一、湊町（お夏、津賀昇。清十郎、駒龍。お梅、津賀龍。母親、團雀。德右衛門、小津賀。德次郎、津賀重。小米、巴龍。佐治兵衛、和佐之助。絃、紋敎）第二、尼ケ崎（光秀、駒登太夫。重治郎巴太夫。初菊、稻太夫。操、都太夫。皐月、彌國太夫。久吉、扇賀太夫。絃、寛三郎）第三、野崎村（お光、素八。お染、駒龍。久松、昇登。母、素次。下女、巴龍。久作、猿春。絃、前、駒清。後、若奴。ツレ、仙玉、猿女、駒登久、清二、清三、巴住）第四、十種香（八重垣姫、都太夫。勝頼、朝見太夫。濡衣、駒登太夫。謙信、麗太夫。白須賀、近衛太夫。小文治、巴太夫。絃（糸造）第五油屋。（貢、彌周。お紺、素廣。萬野、駒若。お鹿、播摩年。北六、佳仙。岩次、小和光。喜助、團蝶。絃、前、三生。後、猿玉）第六、式三番叟（千歳、殿母太夫。翁、湊太夫。三番叟、東太夫。朝見太夫絃、猿之助、猿藏、芳太郎、猿喜知、猿三郎、扇之助、松四郎、美之助、蟻鳳）第七、引退披露口上。第八、すしや（權太、素女。お里、重子。維盛、素昇。御臺所、鶴松。六代君、住世子。村役人、

暑中御見舞

保谷紅司

佳津廣。母、佳照。彌左衞門、染登。梶原、播磨一。絃、三平。後、清一）第九河庄（治兵衞、米太夫。小春、巖太夫。太兵衞、彌國太夫。善六、巴太夫。亭主扇賀太夫。孫右衞門、津賀太夫。絃、前、新次郎。後、新造）第十、政右衞門邸。（津賀太夫、紋左衞門）第十一、沼津（平作、殿母太夫。重兵衞、米太夫。お米、巖太夫。安兵衞、麗太夫。絃、吉作。ツレ、仙十郎）第十二、一力茶屋（由良之助、近衞太夫。おかる、浪花太夫。平右衞門、東太夫。絃、道之助）第十三、忠八（小浪、小津賀。戸無瀨、團雀。絃紋敎、三生。ツレ、和佐之助、津賀龍、巴龍、津賀重、巴住、駒登久、津賀昇、駒照、菊之助）

叶會

六月廿五日喜久本會館に開催。

さわり集（二三吉、たか子）日吉（延翁、鈴蔦）安達（喜遊、鈴蔦）柳（一、二三吉）鳴門（稻聲、二三吉）滿員（巴雪會阿部一報）

巴津天會

最近多端の寶藏寺天昇氏は、會の爲め寸暇を割いて、七月一日夜文化倶樂部に於て久々に巴津天會を開催、同會は既に第百六十一回を重ねてゐる。

本下（染廣）沼津（登喜和）太十（隆昇）日吉（壽昇）堀川（和紅）志度寺（天昇）絃（巴津昇、染廣、たつ子）

綾秀壽會

七月三日夜交正倶樂部に開催。

白石（綾路）紙治（歌吉）八陣（綾登）野崎（壽瓢）安達（壽光）絃（綾秀）滿員盛況（綾秀會報）

豐澤芳太郎連遠征

豐澤芳太郎連は七月四日午后六時より平塚見番の樓上にて同地共樂會補援のもとに賑々しく義太夫會を催ほし非常な好評を博した。

太十（佳舟、兵吉）同（紅陽、兵吉）寺子屋（里芳、芳太郎）沼津（千壺、芳太郎）合邦（一重、芳太郎）陣屋（鳴門、兵吉）新口（茂里雄、芳太郎）三代記（生駒、兵吉）（豐澤芳太郎報）

高瀨操氏

大關披露義太夫會

今春第廿七回東都五十義會に於て東大關に昇進した高瀨操氏は、祝賀をかねてその披露義太夫會を、七月六日午后二時より並木倶樂部で開催した。なほ氏は昨秋東西素義競演會に於て三等賞の榮を擔ひ續いて第廿六回五十義會で西大關とな

り今回東に昇進したものである。

當日の番組左の通り

千兩幟（掛合）おとわ（操）猪名川（清）鐵ヶ嶽（旭）大阪屋（長男）絃（越道）日吉（正鳳、道之助）太十（喜鳳、同）岡崎（津ばめ、同）酒屋（銀司、同）野崎（綿糸、同）儀作（龜鶴、彌國太夫）鮨屋（清、道之助）本下（長男、越道）忠七（掛合）由良之助（清）九太夫（彌國太夫）伴內（道之助）重太郎（長男）彌五郎（三芳）喜多八（龜鶴）おかる（操）力彌（素鶴）平右工門（千鶴）絃（越道）

暑中御見舞

鶴澤寛三郎

大東京嬉會

七月八日午后六時より臨時納涼會を鶴見隣保館にて開催。

儀作（時昇）沼津（文鏡）太十（東松）合邦（和光）紙治（淺路）油屋（花昇）先代（かなめ）寺子屋（大和）絃（龍之助、佳津廣、蝶子）

野澤道之助連の遠征

野澤道之助連は七月九、十の兩日大貫町吾妻座に毎夕午后六時より開催。

初日——日吉（正鳳）太十（喜鳳）沼津（筑波）逆櫓（津ばめ）陣屋（旭）酒屋（銀司）野崎（清）

二日目——太十（正鳳）日吉（喜鳳）先代（銀司）鮨屋（清）儀作（津ばめ）忠四（旭）忠六（筑波）（野澤道之助報）

細川清氏獨演會の盛況

鮨屋、佐太村、合邦と近頃清氏の昇進は目覺ましく、今春より東都五十義會の理事として活躍、努力盡瘁した氏は、清川清獨演會と銘打て七月廿七日午后二時より、淺草松屋ホールに於て野澤道之助の絃で阪東勝治身振劇入鮨屋一段を語り、滿員の聽衆の喝采を博したが、百貨店のホールで獨演會を催ほしたのは氏を以て嚆矢とするものである。

暑中御見舞

民事
刑事
商事
特許事件
迅速懇切に取扱ふ

辯護士
法學士
飛石久太郎

俳號 かなめ

東京市牛込區東五軒町五四
市電東五軒町停留場際
電話牛込 五七四七番

國防費献金

義太夫會

拜啓　三伏の苦熱帝都に居てさい殆んど

凌難き此の折柄北支の空に東亞の護りとして國策遂行の第一線に立て惡戰苦闘せらるゝ我が將士を想へば實に感激に堪へざるもの有之國民の一員銃後の任務として聊かこの勞苦を犒ひ度しと存じ烏滸がましくは存じ候へ共左記の通演藝會相催し收入を擧げて一つはこの慰問に充て一つは國防費の一助に獻げ度時節柄誠に御迷惑とは存じ候へ共小生等の微衷を御推察下され何卒御來聽の榮を賜り度伏而懇願仕候　草々

以上趣旨のもとに、七月廿九日夜の野澤道之助の義太夫會は時節柄頗る盛會であつた。

油屋（越道、仙玉）沼津（道之助、越道、ツレ仙玉）大切淺草藝妓連小うた振り（多喜子、萬才其他）

歸途は下關より山陰地方を巡業、八月十一、十二兩日京都朝日會館に公演する事に決定した。

新義座の渡臺

今春東京で公演の際、竹本南部太夫の發病にて延期されてゐた同座の臺灣行きは、愈々七月十五日神戸出帆にて渡臺し

暑中御見舞

見臺（尾州檜製 絶對保證）
肩衣（染色優美 仕立自慢）
社祢（諸儀式用 諸仕舞並ニ）
ハカマ（懇切丁寧 仕立直シ）

松竹興行株式會社各劇場
演奏用社祢專屬調製處

第本橋區芳町二丁目二番地七
加嶋屋分店
竹中清治郎
電話茅場町(66)五二七七番(呼)

暑中御見舞
貸席 並木倶樂部
淺草・雷門
電話淺一二三五番
義太夫席として皆樣のお氣に召す倶樂部で御座います。
どちらからも最も便利で、落ついて聽くお方まできつと喜びます。乘物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

暑中御見舞
貸席 淀橋倶樂部
淀橋區柏木四丁目
（大久保驛下車西へ一丁）
荻島彌太郎
電話四谷六六五五番

各席語り物帖より

自七月一日至同廿五日

大會又は番組御送付のもの、或は新らたに生れた會は彙報に記載致しますが、本欄は讀者諸賢の催しをなるべく公平に廣く報道する趣旨で、編輯締切の前日各倶樂部を一巡して集めたものであります。但し見落しは御用捨を願ひます。

——記者——

▼**豊澤猿藏連**（一日・交正）白石（あづま）陣屋（三糸）酒屋（山門）壺坂（一糸）紘（猿藏、猿京）

▼**淺草會**（第七回）（二日・松尾）酒屋（自樂）新口（茂里雄）阿漕（金鳳）先代（辰稻）紘（清助、道之助、濱子）

▼**豊澤猿平連**（二日・交正）酒屋（山鶴）柳（鱗昇）八陣（さかえ）妙心寺（語曲）新口（菊泉）三代記（有曲）紘（猿平、團市）

▼**豊澤猿三郎連**（二日・淀橋）夕顔棚（湊、湊太夫）先代（清華、猿三郎）忠臣藏道行（長平、文之助）忠九（武市、猿三郎）（三日・同）組打（湊、湊太夫）陣屋（長平文之助）湊町（たもつ、辰六）吃又（武市、猿三郎、ツレ文之助）

▼**鶴澤司好連**（三日・駒形）辨慶（司聲）日吉（一好）帶屋（どくろ）紘（司好）（七日・花むら）辨慶（司聲）新口（司朝）志度寺（どくろ）紘（司好）（六日・松尾）組打（司郎）辨慶（司聲）菅四（泉）堀川（司朝）紘（司好、好造）（九日・同）本下（司郎）日吉（一好）新口（夢公）油屋（龜好）紘（司好）（廿三日・入谷）八陣（司聲）太十（司朝）山名屋（どくろ）紘（司好、好造）

▼**素曲の會**（四日・交正）先代（團壽、叶）梅由（登盛、長門）新口（都、糸枝）太十（歸世花、盛鶴）酒屋（喜國、糸枝）

▼**竹本米翁連**（四日・淀橋）懸十（鶴龜）布四（松蝶）忠六（美鳳）酒屋（文晁）菅四（美尙）安達（山誠）松王邸（潮）紘（米翁、小津賀、津賀昇）

▼**豊澤團市連**（五日・駒形）逆櫓（いろは）辨慶（司重）城木屋（俵）吃又（靜史）寺小屋（長とろ）紘（團市、スケ團吉）

▼**兜會有志會**（六日・小石川）儀作（松蝶、猿藏）帶屋（和か葉、猿三郎）宿屋（清華、寛三郎）彌作（和樂、猿藏）

▼**鶴澤辰六連**（六日・淀橋）寺子屋（紅司、八十二）喜內（華笑、八十二）紙治（たもつ、辰六）岡崎（隅斗、玉勝）（十日・同）陣屋（太二八）沼津（春枝）柳（三木子）野崎（たもつ）紘（辰六、清市）（十二日・同）赤垣（三七卜）夕顔棚（湊）太十（武市）帶屋（たもつ）紘（湊太夫、辰六、猿三郎）

▼**鶴澤鶴玉連**（六日・入谷）太十（壽）菅四（喜鶴）陣屋（柳汀）宿屋（鶴三）紘（鶴玉）

▼**鶴澤仲次郎連**（六日・交正）日吉（竹聲）壺坂（一樂）岸姫（桑司）八陣（蘇水）堀川（香樂）紘（仲次郎、仲三郎）

▼**野澤粂造連**（七日・入谷）太十（小喜久）白石（竹駒）壺坂（高峰）太十（錦司）寺子屋（瓢六）十種香（芳生）梅由（登盛）野崎（盛鶴）紘（粂造、長門）

▼**鶴澤清二連**（七日・駒形）太十（北壽）酒屋（秀玉）玉三（花光）宿屋（清香）帶屋（都浪）日吉（やなぎ）紘（清二、清三）

▼**鶴澤玉勝連**（七日・文化）太十（要）松王（二樂）寺子屋（紅司）岡崎（隅斗）紘

（玉勝）

▼**野澤語作連**（八日・入谷）十種香（春日）柳（勝代）五斗（鳳正）紘（語作）（十二日・同）酒屋（さつき）安達（高梅）八百屋（鳳正）紘（語作）

▼**鶴澤勝助連**（八日・文化）辨慶（可笑）玉三（喜らく）柳（里芳）寺子屋（國壽）堀川（登）紘（勝助、文之助）

▼**したしみ會**（九日・花むら）太十（吳羽、米翁）鮨屋（華笑、勝八）先代（たもつ辰六）酒屋（和勢、文之助）

▼**豊澤猿玉連**（十日・入谷）梅由（美鳳）先代（吉香）宿屋（鏡鳳）十種香（松雨）紘（猿玉）

▼**大東京嬉會**（十日・菊川）御祝儀（花昇、てふ子）十種香（清勝、てふ子）寺子屋（岡玉、清勝）新口（東松、てふ子）寺子屋（和光、てふ子）本下（文鏡、てふ子）先代（花昇、清勝）野崎（かなめ、仙君）

▼**豊澤長造連**（十一日・小石川）合邦（梅枝）日吉（司樂）岸姫（葵）辨慶（ゆたか）紘（良造）

▼**竹本佳照連**（十一日・松尾）圓覺寺（佳代子）本下（柳光）酒屋（枝蝶）忠六（さとる）新口（正佳）蝶八（淺路）戀十（光玉紘（佳照、佳津廣）（廿二日・入谷）森（佳代子）本下（利夫）柳（雛若）宿屋（富美郎先代（宏亮）新口（正佳）沼津（芦雪）紘（好造、佳照）

▼**義松會**（十一日・菊川）壺坂（高峰）陣屋（松藤）鳴門（小六）太十（玉寶）油屋（司若）沼津（大龍）紘（松造、松四郎小六）（廿一日・松尾）又助（司若）鳴門（小六）宿屋（松藤）酒屋（高峰）沼津（大龍）紘（松四郎、小六）

▼**竹本播志保連**（十一日・交正）森（みくに）宿屋（松駒）日吉（豊）辨慶（さかゑ）同奥（てづか）柳（新昇）紘（播志保、清松）

▼**豊竹駒登久連**（十二日・交正）太十（越松）安達（双葉）森（かなめ）寺子屋（長とろ）赤垣（一三五）紘（駒登久）

▼**松葉會**（十四日・淀橋）修善寺（素鳳）紙治（金扇）合邦（大阪三玉）山名屋（越巴）紘（廣助）

▼**深川會**（十五日・文化）太十（一口）又助（丸一）太十（扇雀）合邦（金吾）忠六（夢中）忠四（登）柳（錦志）紙治（五口）酒屋（美尙）

▼**豊澤猿之助連**（十八日・入谷）二度目（富壽）陣屋（春樂）梅忠封印切（平茶）紘（猿之助、松四郎）

▼**聲豐會**（十八日・淀橋）太十（壽笑）梅由（霞松）御殿（いろ奴）合邦（香水）二度目（松鳳）酒屋（廣笑）紘（柚太夫、猿喜知）

▼**女天會**（第七回）（十九日・駒形）柳（里芳、勝助）安達（登盛、条造）梅由（巴雀、岬）陣屋（千賀子、寛三郎）鮨屋（歸世花、扇之助）油屋（叶、新次郎）

▼**巴雪會**（十九日・交正）柳（利八）先代（童雀）十種香（喜光）柳（一）小磯（三蝶）先代（重八）紘（八重子、巴雪）

▼**互調會**（廿二日・交正）圓覺寺（佳世子）寺子屋（みなと）合邦（乃菊）陣屋（義雀）引窓（源）儀作（二三樂）紘（良造、佳照、蝶子）

▼**豊澤新次郎連**（廿一日・入谷）岡崎（松竹）忠三（豊鶴）寺子屋（團壽）十種香（喜國）鮨屋（米司）紘（新次郎）

▼**○○會**（第七回）（廿三日・松尾）新口（都山代都昇、都太夫）鈴ヶ森（乃菊代佳代子、佳照）太十（旭代喜鳳、道之助）菅四（瓢六、条造）本下（春水、春昇）

▼**鶴澤彌玉連**（廿四日・小石川）太十（佳泉）菅四（福泉）組打（華昇）質店（三司）宿屋（孝樂）野崎（生昇）鳴門（紅美）紘（彌玉、彌之助、彌福）

▼**野澤道之助連**（廿五日・入谷）日吉（正鳳）阿漕（金鳳）太十（喜鳳）鮨屋（清紘（道之助）

會報

投稿歡迎

淨曲無名會

無名會會員一同

本月は一年中で一ばん暑い月ですが、又それ丈けに冷房裝置の完備したアノ涼しいホールで、納涼乍ら一晩ユツクリ皆様に聽いて戴き度いと思つて各自得意の演しものを揃へ、先づ忠臣藏三段目殿中刃傷の段を國聲の露拂ひに始め、臨時應援の八雲氏の忠六お輕身賣りの段、其奥勘平切腹を定評ある和樂氏、同七段目一力茶屋之段の掛合場は國聲一人で十人の登場人物を語り分けて見やうといふ趣向次ぎは東都に於ける世話物語りの名手たもつ氏得意の鰻谷、切り前は去年上演して意外な好評を博して聽き手から再上演を切望されて居た美峰氏の先代萩御殿之段、大切りは例に依つて東都素義界の總帥中澤巴さんの油屋十人斬、巴さんは人も知る斯道五十年の老巧、土佐太夫は引退しても俺は頑張るといふ油の乘つた熱演もの、斯様な譯で既に五千枚のプロも組み上つて準備は整ひました。

然る處俄然北支事變の擴大に連れ全日支の風雲ははやての如く急を告げ、各地の皇軍は其精鋭をすぐつて大擧百度以上大熱の戰線に向ひ、國威の宣揚と吾等東洋民族永遠の平和と安泰の爲めに、今や敢然として勇躍出陣のまつ最中なのであります。國内に於ては新聞でも見らるゝ通り官民協力眞に擧國一致の世界的聲明のもとに所信に邁進し、銃後の國民は婦女子一兒童に至る迄陸軍へ貯金函を持參する等の可憐さ、美しく涙ぐましい國民性が今隨所に美談を咲かして居るのであります。しかして其君に忠誠を誓ひ國家社會の義に處する日本精神の根元は、我が淨曲の古來一貫民衆に普及徹底せしめ來つた處で、現國民忠義の心魂の一半は正に義太夫藝術存在の賜ものといふても過言に非ざる事を信ずるものであります。

我が淨曲無名會ではこの擧國一致の非常時局に際し、殊に畏くも　兩陛下の御還幸啓を拜して恐懼感泣、直ちに淨曲人の本領に從ひ、七八兩月の會を中止して其費用全部を陸軍省へ持參致す事に決議致しました。

斯様な譯で豫て豫告申上げた七八兩月廿六日電氣倶樂部に開催の無名會は開會致しませぬ事になりましたから皆様方も何卒御了承下さい。

國家非常の時、浮薄な人心を緊張せしめて、日本精神高揚の詩吟が怒濤の様な勢ひで全國に流行し始めました。次ぎは國粹藝術の王座淨曲興隆の番です。

淨曲人の振ひ立つ時機が來ました、應援團の活躍時代が參りました、共に協力して進まうでは御座いませんか。

昭和十二年七月

表裝は叮寧と迅速

本郷・菊坂・一

芋弘堂

POST 各地通信

京城　愛好生

京城の竹本東廣師は約七十日間稽古を續けましたが、これに師事した連中は、同師の歸阪を送る會を七月九、十兩日午後七時より朝日座に開催し、各々大熱演、賑々しき送別演奏會であつた。

初　日――本下（竹本東）合邦（三國）中將姫（扇昇）赤垣（華名目）忠四（喜登）

二日目――百度平（竹本東）忠四（秀清）鮨屋（玉糸）布四（露京）寺子屋（楓江）絃（東廣）

大阪　鐵老生

▼團友會（七月七日）

橋本（義鳥）野崎（貴道）椎の木（紫幸）菅四（登一）新口（和十）湊町（貴仙）

▼野澤市松連（七月十日）阿古屋掛合の呼びものに、二重のお土産といふ景物に七時には既に超滿員。

御所三（柳司）八陣（美能瑠）岡崎（養老）白石（新庄家）大切阿古屋掛合（阿古屋、新庄家）（榛沼、柳司）（岩永、養老）重忠（美能瑠）ツレ（猿若）三曲（吉造）

▼清交倶樂部（第九回）七月十三、十四兩日道頓堀倶樂部に開催、毎日午後一時より語り時間三十五分、出番は抽籤にて、

初　日――夕顔棚（さくら、六之助）上燗屋（金龍、吉太）忠六（みやこ、千鶴）すしや（紫紅、清芳）御所三（葛城、德若）岩井風呂（松光、友作）沼津（立花、德若）菅四（信濃、稻丸）日蓮三（野香、千鶴）鎌腹（轟、六之助）佐太村（清司、千鶴）忠九（梅光、德若）揚屋（芦月、清芳）吃又（眞若、稻丸）堀川（千歳、友平、ツレ市松）

二日目――組打（時司、六之助）太十（六勢、六之助）忠四（雁昇、周防）菅四（小富士、德若）壺坂（璃鶴、六之助）逆櫓（春市寛市）陣屋（和鳳、小勇）鮨屋（永寶、旭次）合邦（源史、寛市）腰越三（タツミ、德若）港町（其笑、友造）講七（鶴峯、友造）菅四（錦昇、吉左）酒屋（一朝、千鶴）野崎（いづみ、泉糸）以上三十名

▼久留滿會（七月十日）於道頓堀倶樂部「故米田米鹿、同鹿の子」兩佛慰靈追善會である。合邦、鶴榮婦人初手向として、岸姫掛合あり、其他略。

◆輪花◆束花◆籠花◆

暑中御見舞
御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候
新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

上野　地下鐵ストア
坂田盆栽部
下谷南稻荷町（青バス車庫前）
サカタ・フロリスト
電話（下谷）六一八一番

當座帳

▽松葉會事務所を京橋區新富町二ノ一五番地豊澤廣助方へ。

▽吉岡十八公氏　大垣の吉岡十八公氏は故人となりし土地の素義並に師匠の追善義太夫會を八月廿二日開催、東京よりは栗原千鶴、吉田美地句氏參會。

▽大用大喜津氏　嚴父大用嘉助氏は六月廿九日腦溢血にて永眠。

▼竹本近衛太夫　品川區大森海岸二六一八番地へ轉居。

▼豊竹猿司　小石川區指ヶ谷町一四六番地へ轉居。藝妓屋開業。

▼豊澤團造　大森區新井宿一ノ一〇番地へ轉居。

▼豊竹宮太夫　大阪市南區阪町十番地へ移轉。

▼竹本小土佐　品川區五反田三丁目一一〇番地へ轉居。

▼豊澤廣助　京橋區新富町二ノ一五番地に仮寓、稽古場とす。

◆◆◆◆◆編輯後記◆◆◆◆◆

★猛暑となりました、皆様の御健勝を祈ります。

★前號文樂特輯には、忠九不上演問題に就て皆様の御高見を伺ひ上げました處、多數の御返事をいたゞき其他文樂研究の好伴侶たる安藤氏の『文樂覺え書』を初め、澤山の有益な御寄稿を賜りました事を深謝致します。

★忠九不上演問題が導火となつて、今後の文樂座に新機軸を生じたなら本懷の至りであります。それにしても、近江氏力説の如く東都素義界の大團結の力を俟つ事、切に望んで止まない次第であります。

★門前の小僧であつた復業の繪筆の方が、どうやら本業めいて來まして、遊歴と言つては大仰ですが、兎角不在勝ちで皆様に大變無沙汰を致しております。お許し下さい。これも『太棹』經營の一つの仕事で、繪筆を持ち乍らも太棹の編輯には苦心してゐます。その證據には最近本誌のめき〳〵と良いものになつて來た事を認めていたゞき度存じます。

★暑中御見舞の御芳名掲載方をお願ひ申上ました處多數の御快諾を得まして難有御禮申上ます。

★本號を發行致しますと佐渡へ出掛けます。久々に順德帝の御廟や日蓮の遺蹟を拜し、友人塚原天南星君の努力に成る紅葉山人の句碑にも初めてぬかづき、「居よいか住みよいか」廿二年振りの佐渡ケ島は「佐渡に横たう天の川」などを聯想しながら此の編輯を終りました。

—芳河士—

暑中御見舞申上ます

八月猛夏

太棹社

富取芳河士

同さく女

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

高島一廣氏
廣瀬いろは氏
岡崎円六氏
吉川浪補氏
平野ろ昇氏
阿部一氏
平田平和氏
中澤巴氏
竹内とをる氏
安藤どくろ氏
吉田登盛氏
小川都山氏
安藤都昇氏
保々長平氏
栗原千鶴氏

神馬里芳氏
本木大熊氏
鈴木和樂氏
小林和舟氏
本多可笑氏
大和田可笑氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
西田可松氏
勝川勝川氏
紺我笑氏
竹内たもつ氏
松尾武市氏
大用大嘉津氏
田口辰壽氏
疋田大龍氏
井上巽氏

乃村素弘氏
坂倉素遊氏
浮谷祖樂氏
片山つばめ氏
宮本武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村乃菊氏
高野昇氏
中野吳羽氏
石川華笑氏
清水彌生氏
國井丸都氏
松林福笑氏
鈴木兒雀氏
水戸部壽氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
寶藏寺天昇氏

大築葵氏
松本朝章氏
及川旭氏
柳有明氏
寺岡三幸氏
木村さかえ氏
平井榮氏
間宮さくら氏
細川清氏
金田金鳳氏
井田菊泉氏
錦松氏
淺田奇聲氏
歸山歸世花氏
川奈部銀司氏
猪谷銀水氏
岩木義雀氏
岩田末成氏
高瀨操氏

吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　岡田源氏　北村三葵氏　吉田三芳氏　鈴木松賓氏　玉井松樂氏　菊地秋月氏　平井壽樂氏　山田壽瓢氏　秀峯氏　田口司重氏　濱口秋華氏　武笠宏亮氏　高品一重氏　桑原美峰氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　湯原清司氏　日野靜波氏　沼井盛鶴氏

（地方之部）

米國　平野一昇氏
同　武榮玉氏
同　杉山陶岳氏
同　兼廣廣玉氏
同　西本西紫氏

樺太　宮下杉鳳氏
横濱　霜島錦司氏
同　田島集樂氏

第八拾八號　（毎月一回廿五日發行）

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

昭和十二年八月三日印刷納本
昭和十二年八月五日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稲田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稲田町五八
印刷所　栗原印刷所
電話牛込一四五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

定價
一部　金三十錢　郵税三錢
六月分　金一圓八十錢　郵税共
一年分　金三圓　郵税共

廣告料
普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

諸印刷物引受

皆様のおすゝめに從へまして、弊社に諸印刷物をお引受けする事に致しました。

大小、多少に關はらず何卒御下命の程を偏にお願ひ申上ます。

牛込一四五一番（太棹の印刷所）へお電話を戴きますか、又は弊社へおハガキを賜りますれば、直ちに參上仕り、極めて廉價に、迅速に、出來得る限りの御便宜を計ります。

太棹社

暑中御見舞

三絃界の福音

發明界の大家
寺本善三郎氏 發明
特許 東さわり

如何なる素人にても『東さわり』は自由自在にさわりを出して、何んとも言へぬ彈心地を感じます。

定價 一箇金拾圓

取附料は當方にて負擔致します。

寺本氏は八十一歳の高齢で元氣益々旺盛、十三歳より發明界に天才を發揮して、今日迄三十餘種の特許品があります。目下飛行機の研究中で、燕式と稱し、信州の岩つばめを目標として、どんな强風でもひつくり返らぬといふ。

氏と別懇の巖本善治氏は本社富取主幹と親しい處から同氏は本社にその發賣方を依頼されましたので、本社は取次を引受ける事に致しました。

小石川區音羽一丁目一四
太棹社代理部

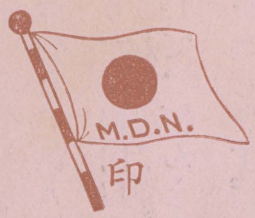
製造元
東京市豐島區西巢鴨町
親託合資會社
電話大塚二五九一番
振替東京參五參壹參番

昭和十二年八月三日印刷納本
昭和十二年八月五日發行
（毎月一回廿五日發行）
太棹（第八拾八號）
定價 金參拾錢

暑中御見舞

醫療用
齒療用
治療界の寵兒!!

於各大博覽會
賜優良國產金盃賞牌多數



東洋に於ける斯界のパイロット!!

本木注射針

俳號 本木大熊

製品種目

醫療用
齒療用
超不酸化鋼製
不酸化鋼製
引拔鋼化鐵製
英國最優鋼製
白金製
十八金製
ニッケル製

東京市瀧野川區中里四四七
本木注射針製作所
所主 本木梅治郎
電話水石川(85)〔二四三七番〕〔五二〇九番〕
出張所 東京市本郷春木町二ノ五
電話水石川(85)三四一〇番
研究所 千葉縣君津郡富岡村田川